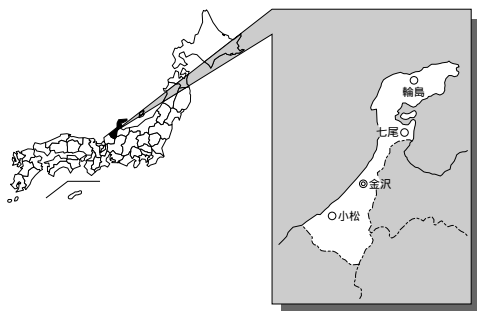


土木紀行

地域の発展とともに 生きる橋

時代の移ろいとともに
姿を変える犀川大橋

石川県金沢市



金沢市中心部を東西に流れる犀川に架かる犀川大橋は、金沢市の中心繁華街である片町にも近く、金沢市民に親しまれる名所であるとともに、国道157号として地域の交通を支える重要な橋です。

その歴史は加賀百万石の藩祖・前田利家が1594年（文禄3年）に架けたのが最初とされています。当時の様子は、金沢城下図屏風などに周辺の賑わいとともに描かれていますが、木造橋であり、暴れ川であった犀川の洪水や氾濫により、たびたび流されたり損傷を受けました。城下町一の大きさを誇り、犀川に架かる唯一の大橋であったことから、今と変わらず当時も人の交流や物流が盛んでした。城下町金沢の発展とともに幾度もの架け替えが行われましたが、1898年（明治31年）の架け替えが最後の木造での架け替えとなりました。

大正時代に入り、市電敷設のため、それまでの木造橋を取り壊し、鉄筋コンクリート製の永久橋が架橋されました。フランス・アンネビック式の

鉄筋コンクリートT桁6径間橋、橋長32間（約58m）、幅8間（約14.5m・軌道併設）の橋梁で、市電が走る堅牢さが自慢の橋でしたが、1922年（大正11年）8月、当時の金沢測候所（現金沢地方气象台）開設以来最大の集中豪雨により、上流の橋が流失し、橋材・流木等で堰き上げられたことにより、落橋という不幸に見舞われ、架橋から



写真 2 短命に終わった鉄筋コンクリート橋の犀川大橋



写真 3 市電が通る犀川大橋（昭和初期）

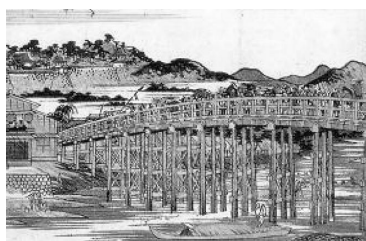


写真 1 木造橋時代の犀川大橋（幕末の錦絵）

【犀川大橋の橋梁概要】

路線：国道157号
所在地：金沢市片町～野町・千日町
架設：1924年（大正13年）
橋長：62.308m
幅員：21.669～23.669m
上部構造：鋼下路式単純曲弦ワーレントラス
下部構造：半重力式コンクリート橋台（直接基礎）

3年という短命に終わりました。

現在の犀川大橋は、落橋したコンクリート橋の復旧として、1923年（大正12年）5月に着工しましたが、関東大震災の復旧で鋼材の入手が困難となり、一部は英国製の鋼材も使用し、1924年（大正13年）3月に完成しました。本橋の形式は「鋼下路式単純曲弦ワーレントラス橋」と呼ばれるもので、当時としては珍しく橋脚がない鋼構造の橋であり、設計は日本の橋梁技術の先駆者である関場茂樹氏が手掛けており、当該型式としては、国内最古の橋梁であり、2000年（平成12年）にその価値を認められ、国の登録有形文化財に指定されました。小さな部材を組み合わせたトラス材、橋梁上部にある橋銘橋や手摺りの意匠に、大正時代の雰囲気色が濃く残っています。

地域の発展とともに80年以上の歴史を刻み、まちのシンボリック的存在ともなっている犀川大橋を後世に残していくために、これまでに何度か補修工事を実施しており、最近では2009年（平成21年）

に塗装の塗り替えと補修工事を実施しました。

塗装の塗り替えについては、地域のシンボルにふさわしい色彩を選定するために、有識者等で構成された「犀川大橋景観検討委員会」を設置し、「周辺の自然環境との調和」「シンボル性」「金沢らしさ」の三つをコンセプトとして検討を進め、犀川のイメージ、金沢の山と海が混じり合った自然のイメージをもった青緑系の5段階のグラデーションによる塗装を行いました。また、金沢らしさのある景観アクセントとして、橋銘板を国内シェア99%を占める金沢産の金箔「金沢箔」で装飾してはどうかという提案がなされました。この装飾は、地元の片町商店街振興組合など周辺商店街の皆さまの賛同と資金援助をいただき実現しました。

補修工事が完了した犀川大橋は、金沢の歴史・伝統を伝えるとともに、現代的な色彩感覚も感じさせる橋となっており、今後も地域のシンボルとして歴史を重ねていくことでしょう。



写真 4 補修工事が完了した犀川大橋
金沢箔で装飾した橋名板がアクセントとなっている



写真 5 側面から見た犀川大橋
犀川と周辺の山並みと馴染む色彩を採用した



写真 6 橋名板への金箔貼り付け作業
高度な技術が必要なため、「鑄物の町」富山県高岡市の職人の手により作業が行われた



写真 7 金沢箔で装飾された橋銘板
橋銘板の文字は架橋当時の県知事が書いたものである